

篠山市立青山歴史村蔵『松が浦嶋』の翻刻と解題

森井信子

要旨 「松が浦嶋」は従来、作者不明の書とされてきた。その内容は「隆房集」や「建礼門院右京大夫集」などと同系列に属する日記的な恋愛贈答歌集である。本書の伝本はこれまで島原図書館松平文庫蔵本が知られるに過ぎなかったが、今回新たに篠山市立青山歴史村蔵本の存在を知ることができた。そこで本稿では青山本を紹介し、本書の内部徴証からその作者、成立事情などを明らかにした。本書に登場する一組の男女は書中誰と明記されているわけではない。しかし男歌の中に藤原為家の歌が見出されることから、男を為家、女を阿仏尼であると比定することができる。それは本書に見られる男女の動向と、他書から窺われる為家・阿仏尼の動向とに符合する点が見受けられることから首肯されよう。そして詞書が当事者のみが知りうる事情をすべて女の立場で記していることから、本書の作者は阿仏尼であると考えられる。書名に用いられている「松が浦嶋」の語は、為家歌では常に阿仏尼を暗示して用いられているものであり、阿仏尼が書名として選ぶのにまことに相応しい言葉である。阿仏尼は為家との思い出を風化させないように、いわば記念碑として本書を編んだのではないだろうか。

はじめに

『松が浦嶋』は男女一組の恋愛贈答歌集である。本書は井上宗雄氏によって「七十余首の恋愛贈答歌の集。為家二首以外は作者不明阿仏尼全集の歌三二にやや似た歌がある」と紹介されたものである。⁽¹⁾その後、書中に為家の恋歌がさらに二首存することが判明した。⁽²⁾本書の伝本は、これまで島原図書館松平文庫に蔵せられるのみで、他に知られていなかった。このたび佐々木孝浩氏のご教示により、篠山市立青山歴史村に一本が蔵せられていることを知り、それを調査することができた。本稿ではその翻刻を行ない、本書の作者と成立事情について私見を述べたい。尚、青山歴史村蔵本（以下、青山本と呼称）は『青山会文庫所蔵 和漢書分類目録』⁽⁴⁾には記載されていない。書名が不明だったこと、作品の知名度が低いことなどからか、この十三丁ほどの小歌集は未整理文書の中に紛れていたのである。

青山本の書誌的事項を左に掲げる。

松が浦嶋（仮題）〔江戸初〜前期〕写 綴葉装一帖

篠山市立青山歴史村蔵 表紙を欠く。17・5×17・5cm。外・内題を欠く。料紙、斐楮交漉紙。遊紙、前一枚。本文、九行、和歌二行書。詞書は和歌より一、二字下げ。字面高さ、地の文約12・3cm。和歌一首約14・0cm。墨付十三丁。奥書、書写奥書「二條為明卿以自筆書写校合畢」。影写本。乱丁、落丁有り。⁽⁵⁾

翻 刻

【凡例】

- 一、この本文は篠山市立青山歴史村蔵『松が浦嶋』の全文を翻刻したものである。
- 一、文字は通行の字体に改めた。
- 一、行取りは原本通りとし、丁の変わり目に丁数とその表裏とを略記した。
- 一、翻刻本文の下部には島原図書館松平文庫蔵本（以下、松平文庫本と呼称）との本文異同を掲げた。
- 一、本文異同には、漢字・仮名の別、仮名遣いの違いは挙げなかった。
- 一、乱丁部分は順序を正し、落丁部分は松平文庫本によって補った。
- 一、歌番号を私に付した。

【本文】

ナシ―松か浦嶋

ナシ―れいのくせにや又

3才「1いたつらに袖こそぬれめさりとともと

たのむにもらんあめの心は

かへし

2 たれゆへに心と袖をぬらす覧

たのまぬ雨のもらんものは

いか、有けんおとこ

3 われなからならぬ心をもとけとも

うらみてしもそ恋しかりける

かへし

しもそ—しもと

3㍷ 「4 うくつらくおもへはいと、なけかれて

ならぬこ、ろはけにそかなしき

はてはみぬよのことさへうたて

あるさまにいひなして

後の—のちは

5 しるしらすゆき、の後の跡とめて

さらにくやしきあふさかの山

かへし

もとめん—と、めん

6 たれにかはこ、ろもとめんあふさかの

しらぬゆき、の名にはたつとも

4材 「7 いまさらにかさなるかすやまかふとて

なきなをそふる浦のはまふゆ

かへし

8 さまのみやはうきをかさねんひとへたに
おもへはつらき浦のはまゆふ

又かくすこと有とて

9 そこゝるなきふちも有ける山河を
あさきこゝろとなにたのみけむ

返し

10 山河のあさき心をふかしとも

4ウ 「ふちせにかはる人やしるらん

たのむともなきすさみはかり

にあまたのとし月もすきにける

をあやしきまできゝわひぬる

人の上のわつらはしきもおもひか

ねつゝ、いまさら見えぬ山ちに

たつね入ぬへきころしもい

せのかたへさりかたくおもひた

つことありすゝか河ふりはへ

ておもひたゝんやそせの浪

あやしきまで—あやしきとて

上の一よの

ころしも—こゝろしも

14

もかねて思ひしらる、袖のし

つくなれとあまてる神の宮

はしらゆるきなくやおもひさた

めてけんう月のつこもりこ

ろしのひて思ひたちぬさみた

れつ、くたひの空はいと、そ

なたの雲もへたてはてたる心

地するに京よりふみあり日こ

ろのおほつかなさをかきつくして

11す、か河ふるひかさなる五月雨に

10「かよふこ、ろは水もまさらす

12さらぬたに程は雲井のはるかさを

宮こへたて、おもひやる哉

返し

13ひかすふるおほつかなさはす、か川

おとつれてたにせきもやられす

14夢ちさへほとは雲井とみゆるかな

よるの衣もみやこへたて、

つ、く—うちつ、く

2才
一

二日はかりへたて、又宮こより
ふみありといふいそきあけて

見れはた、をなしさまなる事

ともを書ておもひかねぬるよの

夢さへおなしこゝろならずなど

うらみて

ならず―ならて

15 恋しさはなをそかはらぬいせしまや

うらよりをちとみゆるゆめにも

返し

16 われからとうらみなれてやいせのあまも

おもはぬかたの夢に見はけん

見はけん―見えけん

又ふみありさりともしまはた

2才
一

ちかへりなむとたのむ日数も

すぎぬれはいとおほつかなく

なにとてわか心なからなみち

はるかにゆるしそめけんあ

ゆるし―ゆるかし

ちきなくなど書て

17 時のまもたちははなれしからころも

おもへは夢のつねならぬよに

よに―かな

18 いかにせむざりともと待よひくの

ふけのみまさるやまのはの月

19 いせの海のもの、松はらまつとても

5才「いひし日数になみはこえつ、

返し

20 心見しならはしもの、なくさめも

た、わすられて恋そわひぬる

21 まつとても日数こえ行わか袖は

波のしたにやくちてやみなん

なをこゝろならず日数ふるに

またみやこより

22 とへかしなあまのまてかたさのみやは

まつに命のなからへもせん

5ウ「返し

23 いさしらすあまのまてかたなからへて

またあふまてとたのむいのちも

又

ナシ―新後撰恋二

24 たひころも袖ふりはへてす、か山

こゆらんほとをおもひこそやれ

返し

25 す、か山こえてはちかきみちなれと

おもひやるにははるかなる哉

6才
又

26 なみたこそ猶ふりまされす、か河

おもかけにのみやそせしら波

(一行空白)

27 あけて見ぬ夢のた、ちのふたみかた

おほつかなさを恋つ、そふる

返し

28 見せはやな涙をそへてす、か河

おもふにまさるやそせしらなみ

29 伊勢のうみのしほひはるかにたつねても

6才
「 おもはぬかたはいふかひもなし

30 わかれちのありあけの月のうきにこそ

たえて命はつれなかりけれ

ナシ―続拾恋三

たえて―たえて^へ

31

つれもなくたえて

命にまたや見ん

わかるるそらの

ありあけ

の月

男

32 日をへてはいかにかせまし山かつの

『 (松平文庫本ヲ以ッテ補ナウ)

かきほにさける花の露けさ

返し

33 たれに又おもひよそへて山かつの

かきほのはなのつゆけかるらむ

おとこ

34 いかにせんうらはの芦のよと、もに

みちくるしほのあかぬみるめを

返し

35 たのめとやみちくるしほの程なさも

さしもみしかきあしの一よを

たえて—たへて

36 うらみてもおなしいはねによせかへる

あらいそなみのわれそかなしき

返し

37 たちかへり猶そうらみんわれはかり

あらいそ波のくたくこゝろは

(一行空白)

38 人はけにおもふにつけていと、しく

あやにくなるそ心なりける

返し

39 おもふらんほとをもしらてとにかくに』

7才「あやにくなるはなみた成けり

おとこ

40 朝日まつこほりのうへにふる雪の

きへはともにとたのむはかなさ

返し

41 あは雪のよにふるとたにたのまねは

うすきこほりのわれそかなしき

うきにたえたとし月もま

7ウ
「

たいまさらにいかなることか有けん
おなし所にもすみはつましきさ

まなれはなくくたちわかる、

暁このまもるありあけのかけ

さへあやにくなるに

おとこ

42 わかれちの有あけの月のうきにこそ

たえて命はつれなかりけれ

返し

43 つれもなくたえて命のまたやみん

わかる、そらのありあけの月

霜月はかりに山のかたにす

8オ
「 まゐたるところへ

44 あくるよりそなたのそらをなかめつ、

なくさむかたにゆきやふりぬる

返し

45 身をかくすほどをしはしもすみわひぬ

雪さえぬへき山ちならねは

かくす—かへすく歟

46 わかおもふ心や色にいてにけん

からくれなるの袖にまかひて

ゑかく人のもとよりおとこ

47 くらへはやゑしまいかいそのあまころも

87 「袖になみこすよはのたもとに

返し

48 ほさすともえしまのあまのぬれ衣

なみこす袖にくらへてはみし

49 しはしたになにをたのむのかりかねの

たひよりたひにとをさがるらん

おとこ

50 ねてもみえうつ、もさらぬおもかけの

かつ恋しきはせんかたもなし

51 見るま、におなし涙そせきもあへぬ

かはせる袖の夢のた、ちは

94 「あれより

52 たもとはあはれさきたつ時雨かな

神な月とは思ひわけとも

えしまのあまのぬれ衣―絵しまか礒のあまころも

涙そ―なみたと

返し

53 しくれにもかせにも、ろき涙かな

うつろふ木々のこの葉みたれて

又あれより

54 冬のくるかたをそなたとおもふにも

時雨は袖にまつこほれつ、

返し

97 「55 おもひやれこしちは冬の名にふりて

ゆきも時雨も袖そひまなき

女

56 こ、ろよりなみたも袖にくたけつ、

またみぬゆめにまよひにしかな

57 たれゆへにはるのいくよをぬともなく

ねすともなくてあかしかぬらん

これより

これ―あれ

58 おもひやれ月になみたのしくれつ、

ほさてぬるよの秋のたもとを

104 「 返し

59 ほさてみるたもとやそらにしらるらん

しらるらんーくらからん

くまなき月の又しくれゆく

60 うた、ねにみてたのまれぬ夢よりも

人のうつ、そ猶もはかなき

返し

61 はかなさはたかまこと、もたのまれす

た、うた、ねの夢もうつ、も

おもひのほかにも又めぐりあひ

てのちおとこのゆめに

107 「62 むすひをけ

このよはいはす

のちのよも

おなしはちすのつゆ

のちきりをと

いふとおもふほとに

おとろきぬと

かたるを

き、て

女

114 「63 たのむそよおなし

はちすのつゆなれは

よ、かけてこそ

むすひをき

けめ

おとこ

64 かたらふも猶こそあかね郭公

なくく帰しの、めのみち

女

65 きぬくにあくる雲井の郭公

114 「人のたもとの涙をやかる

66 うきはみなよのことはりになくさめて

身のつらさをそなけきわひぬる

67 ゆきかよふわか心さへかきられぬ

さゆるこしちのゆきのあけほの

68 いと、しくおほつかなさもはるけぬに

いかにやへたつけさの朝きり

かきられぬ—かきくれぬ

69 物おもふこ、ろさへはれぬ神な月

しくる、雲にきりをかさねて

おとこ

124 「70 風吹はもろきこのはのかすくくに

たくふ涙の程をみせはや

女かへし

71 しくれにも風にも、ろきなみた哉

うつろふき、のこのはみたれて

72 こ、ろのみおなし空なるありあけは

おもひいて、そ月もみるらん

返し

73 なかむらん

おなし空なる

127 「

おもかけも

わか身にそへる

有あけの

月

134 「二條為明卿以自筆書写

— 這一帖二条家為明卿以自筆

校合畢

本不違一字令書写即座校

合了

解題

一、書名

青山本に外題、内題はないが、松平文庫本には外題、内題ともに「松か浦嶋」と記されている。そのため本書は『松が浦嶋』と呼称されている。しかし、この書名については疑問視する説がある。今井明氏は「当該小歌集の1番歌の前には「松か浦嶋」という歌句を含んだ男女の贈答歌があつて、その部分が何らかの事情で欠落してしまい、「松か浦嶋」という歌本文だけが残され、それがあたかも書名のように扱われてしまったのではないか」と推測されている。⁽⁶⁾この推測は青山本に書名がないことと矛盾はしない。しかし稿者は後述する通り、「松が浦嶋」という歌語こそが本書の成立に関わる重要な言葉であると考ええる。

今井氏はその残存本文に該当する歌を為家の「浪のよるしほのひるまもわすられず心にかゝるまつがうらしま」(『玉葉集』巻十一・恋歌三・188)としている(この歌と書名との関わりは既に注2拙稿で指摘した)。詞書に「女につかはしける」とあるのでこの歌が本書に収められていた可能性は高い。しかし実は為家には「まつがうらしま」を第五句に置く歌がもう一首存する。「康元元年毎日一首中」の詞書を持つ「夏かりのをぎのふるえのさびしさにいとどこひしき松がうら島」(『夫木和歌抄』巻二十三・雑部五・「島」・188)がそれである。本書の19番歌は『夫木抄』

(180) に見える為家歌で、その詞書は「康元二年毎日一首中」とある。康元二年の為家詠歌が本書に見えることは、その前年の恋歌が本書に収められていた可能性を損なうものではなからう。「松が浦嶋」に関わる為家歌として康元元年の「夏かりの」を併せて挙げておきたい。

二、松平文庫本との本文異同

松平文庫本の奥書は「這一帖二条家為明卿以自筆本不違一字令書写」とある。これに対して青山本の奥書は「二條為明卿以自筆書写校合畢」とやや簡略である。両本とも為明自筆本を書写した点で共通するが、青山本の半葉行数は十行、松平文庫本は九行と異なっている。青山本は影写本であり、松平文庫本は奥書に「不違一字令書写」とあるから、ともに依拠した本をその書式まで忠実に書写したものである。とすればこの行数の違いは二種類の為明自筆本が存在したことを窺わせるものではないだろうか。

松平文庫本は内題の後、改行して「れいのくせにや又」という詞書から本文が始まる。青山本は内題と右の詞書とを欠き、第一行は空白で第二行から本文（1番歌）が始まる。半葉十行書とする青山本は、この丁を空白の行を含めて十行で書写していることから、詞書を書き落としたとは思われない。また、これ以外に両本間には二十四箇所の本文異同がある。同じ為明本を書写しておきながら、中には単純な誤写とは考えられない異同がある。例えば、11番歌詞書では青山本が「つ、く」であるのに対して松平文庫本は「うちつ、く」、17番歌では青山本「つねならぬよに」に対して松平本「つねならぬかな」、48番歌では青山本「えしまのあまのぬれ衣」に対して、松平文庫本「絵しまか磯のあまころも」、59番歌では青山本「そらにしらるらん」に対して松平文庫本「そらにくらからん」などである。

これらの本文異同があるのは、それぞれの親本が異なっていたからではなからうか。現段階では、本文の異なる二種類の為明自筆本が存在していたと考えておく。

三、内容構成

本書の詞書の中には、詳しい詠歌事情が語られているものがある。そこから窺われる詠者二人の動向を追跡してみると贈答歌の配列に乱れが認められる。11番歌詞書から、女が伊勢に出立したことが知られ、11〜29番歌までは、都と伊勢との間で交わされた贈答歌が並ぶ。しかし、次の30・31番歌の贈答歌は、暁の別れを悲しむ歌となっている。これら二首は42・43にも重出する歌である。42番歌には詞書が付され（30番歌には詞書はない）、後の内容ともつながっている。したがって30・31番歌が、京都・伊勢間の贈答の後に続くのは不審であり、これらは竄入かと思われる。32番以降の贈答歌には、女が帰京した様子を窺うことはできない。ところが42番歌詞書には「おなじ所にもすみはつまじきさまなればなくくたちわかる、暁」云々と、既に女は都に居住しており、やむを得ない事情により転居を余儀なくさせられたという。そして、62番歌詞書には「おもひのほかに又めぐりあひてのち」云々と、二人は再会を果たしたとある。このように二人の動向は正確に捉えにくい点がある。

次の表は、本書から詠者の動向を示す詞書と時節に関わる歌語とを抽出したものである。

70 } 71	69	67	64 } 65	62 } 63	58 } 59	57	52 } 55	44 } 46	42 } 43	40 } 41	32 } 33	22 } 29	17 } 21	15 } 16	11 } 14	歌番号
																詞書
<p>・あまたのとし月もすぎにける</p> <p>・いせのかたへさがりがたくおもひたつことあり</p> <p>・う月のつごもりころしのびて思ひたちぬ／・京よりふみあり</p> <p>・二日ばかりへだて、又宮こよりふみあり</p> <p>・又ふみありさりともしまはたちかへりなむとたのむ日数もすぎぬれば</p> <p>・なをこゝろならず日数ふるにまたみやこより</p> <p>・うきにたえたととし月もおなじ所にもすみはつまじきさまなれば</p> <p>・霜月ばかりに山のかたにすまゐたるところへ</p> <p>・おもひのほかにも又めぐりあひて</p>																
<p>五月雨</p> <p>まつとても日数こえ行</p> <p>日をへては</p> <p>ふる雪・あは雪</p> <p>ゆきやふりぬる</p> <p>時雨・神な月・冬のくるかた</p> <p>はるのいくよ</p> <p>しぐれつ、・秋のたもと</p> <p>郭公</p> <p>ゆきのあけぼの</p> <p>神な月</p> <p>しぐれ</p>																和歌

季節の推移を見ていくと、時間の逆行（44番と52番歌）している部分や、秋歌の中に春歌が一首混在（57番歌）する箇所がある。これが錯簡によるものである可能性は、現状からは認められない。これらの不明瞭な点以外に、本書には歌が重複していること（30・31と42・43番の贈答歌、53と71番歌）を勘案すると、本書は未精撰の状態であることが窺われるのである。

四、作者

本書所収の贈答歌の詞書はすべて女の立場で書かれている。その女が男との思い出を風化させないように、いわば記念碑的な贈答歌集として一書にまとめようとしたと考えるのは強ち不当ではあるまい。このような意図を以て本書を成すに相応しい人物として阿仏尼を挙げることができる。以下、本書の作者が阿仏尼であることの蓋然性について述べることにしたい。

本書には為家の歌が四首含まれている。それは以下の他出資料の存在によって知られる。19番歌は『夫木和歌抄』（巻二十三・雑部五・「島」・383）に「康元二年毎日一首中」という詞書で、22番歌は『新後撰集』（巻十二・恋歌二・935）に「弘長元年、百首歌たてまつりける時、不逢恋」という詞書で、29番歌は『為家五社百首』（「恨恋」・554）に「恨恋」の題で（本文に異同あり）、30番歌（42に重出）は『続拾遺集』（巻十三・恋歌三・929）に「弘長元年百首歌たてまつりけるに、暁別恋」という詞書で収められている。稿者は男の他の歌も全て為家歌であると見なす立場で考察を進める。

これらの歌は詞書によれば康元二年（一二五八）から弘長元年（一二六一）にかけての時期に詠まれたものである。

この時期、為家と恋愛贈答歌を交わす女性として第一に挙げるべきは阿仏尼であろう。阿仏尼と為家との関係は建長四年（一二五二）に始まり、⁽⁷⁾ 為家が建治元年（一二七五）五月一日に没するまで続いた。阿仏尼が為家の三十五日追善供養のために書いた『阿仏仮名諷誦』（『為家卿五七日願文』とも）には「歌の道を助け仕へしこと、廿年余り三年ばかり」とある。⁽⁸⁾ 為家の歌道師範としての活動を助けて二十三年といえ、その始まりは逆算して建長四年に当たるとする記述に合致する。二人は「松が浦嶋」所収の為家歌が詠まれる以前から恋愛関係にあったことが確認できるのである。勅撰集に入集する贈答歌と同様に、本書の贈答歌も情熱的である。⁽⁹⁾ 本書の男が為家であるならば、その相手は阿仏尼だといえるのではなからうか。これが本書の作者に阿仏尼を擬する根拠の第一である。

次に『源承和歌口伝』によつて知られる為家と阿仏尼の動向に関わる記事と、本書に見られる男女の動向の記事とを付き合わせてみよう。まず『源承和歌口伝』の該当箇所を掲げる。⁽¹⁰⁾

先由来は、阿房（為相朝臣母）安嘉門院越前とて侍ける、身をすて、後、奈良の法花寺にすみけり。後に松尾慶政上人のほとりに侍けるを、源氏物語か、せんとして、法花寺にて見なれたる人のしるべにて、院大納言典侍（二条禅尼）もとにきたれり、統後撰奏覽之後事也。とし月を、くりて定覚律師をうめり、誰が子やらんにて侍しほどに、はるかにして為相をうめり。其後より為頭母（同侍女）と中あしく成て、嵯峨のこばやしに侍しほどに、先人嵯峨にすみて日比之様にて侍しに、文永八年禅林寺殿御会にあひぐしてまいれり、朝にまかりて侍しかば、大納言連歌の数もおとらじと思へるやらん、父子之礼さ様にはなき事也とて、今出河にて西園寺相国之会の侍し次第、こまかにかたり侍しを、阿房き、て、みづから名望あらん事を思ひて、にはかに持明院の北林にうつりて、嵯峨之旧屋（并）和歌文書以下はこびわたす。

これによると、『続後撰集』奏覧後、阿仏尼が為家の『源氏物語』書写を助力したことがきつかけとなり、二人の中は急接近し、しばらくして定覚を産み、数年を経て、為相を出産した。この後、阿仏尼は為顕母との仲が悪くなり「嵯峨のこばやし」に移った。この後為家と阿仏尼とは「嵯峨」で同居をするようになった。下つて文永八年（一二七二）頃に二人は持明院の北林に転居した。以上が『源承和歌口伝』から窺われる二人の動向である。

一方、『松か浦嶋』にも女の転居のことが記されている。42番歌から45番歌にかけて次のようである（ここには歌の配列の混乱は認められない）。

うきにたえたとし月も、またいまさらになかなることか有けん、おなじ所にもすみはつまじきさまなれば、なくくたちわかる、暁、このまもるありあけのかげさへあやにくなるに、おとこ

42 わかれぢの有あけの月のうきにこそたえて命はつれなかりけれ
返し

43 つれもなくたえて命のまたやみんわかる、そらのありあけの月

霜月ばかりに山のかたにすまゐたるところへ

44 あくるよりそなたのそらをながめつ、なくさむかたにゆきやふりぬる

返し

45 身をかくすほどをしほすみわびぬ雪きえぬべき山ぢならねは

42番歌の詞書から、女が何らかの事情によつて男と同じ場所に住みつづけることが困難となり、已むなく居を移したことが窺われ、44番歌の詞書によつて女が「山のかた」に居を移したことが知られる。これは『源承和歌口伝』の傍線部、阿仏尼が為相誕生後に為顕母との仲が険悪になり、それが原因で「嵯峨のこばやし」に転居したことを示すの

ではないだろうか。¹¹⁾ 42番歌詞書の「うきにたえたとし月」とあるのは、為頭母との仲に耐えて生活してきたことをほのめかし、44番歌の「身をかくす」という表現には、女にそうせざるを得ない事情のあったことを暗示するものと解することができる。阿仏尼は為頭母との折り合いが悪くなったことから「おなじ所にもすみはつまじきさま」となり、為家は「身をかくす」必要の生じた阿仏尼を「嵯峨のこばやし」に避難させたのであろう。以上、本書における女の動向と『源承和歌口伝』における阿仏尼の動向との間に符合する点が見出されることを確認した。これを第二の論拠としたい。

次に「松か浦嶋」という書名から作者の問題を考えてみたい。これを元から本書に付された書名ではなく、和歌の残存本文だと推定する説もあるが、いずれにしても本書に関わる重要な言葉であると考えられる。そもそも「まつがうらしま」の語は、素性歌「おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみけり」(『後撰集』卷十五・雑一・1093)を典拠とする。先に指摘したように、為家の歌には「まつがうらしま」を詠み込む歌が二首あり、そこで為家は「心にかゝるまつがうらしま」(『玉葉集』・108)、「いとどこひしき松がうら島」(『夫木抄』・107)と歌い、「まつがうらしま」をいとおしむ対象(愛する女性)として詠んでいる。『玉葉集』108番歌の詞書には「女につかはしける」とある。岩佐美代子氏は「出典は未詳だが、「女」とはおそらく「心あるあま」——阿仏尼であろう。」とし、参考歌として素性の歌を挙げている。¹²⁾ 岩佐氏が指摘するとおり、為家は素性の歌を踏まえつつ阿仏尼を「心あるあま」として捉えていたのではないか。「まつがうらしま」は「心あるあま」である阿仏尼を暗示した言葉なのであろう。このように考えれば「まつがうらしま」は二人の贈答歌集の書名としてふさわしく、阿仏尼がこの語を書名に選んだことも十分に考えられるのである。

以上三点を根拠として、本書は阿仏尼によって編まれた為家と阿仏尼との贈答歌集であると認めることができよう。

それでは、この視点から本書所収歌と他書に見られる二人の歌とを比較してみよう。まず本書に所収される暁の別れの男歌に、

64 かたらふも猶こそあかね郭公なくく帰しの、めのみち

とある。一方為家の『中院集』（文永三年十二月十一日、続百首「暁別恋」）には、

30 うくつらく夕つけ鳥のこゑたててなくなくかへる袖の別路

とある。「なくなく帰」という表現は、俊成歌「わけきつる袖のしづくかとりべののなくなくかへる道芝の露」（『長秋詠藻』・雑歌・361）を踏まえたものであろう。これらは共に俊成の哀傷歌を恋歌に詠みかえており、この点に歌風の共通性を見出すことができる。¹³

次に掲げるのは本書の女の歌である。

55 おもひやれこしちは冬の名にふりてゆきも時雨も袖ぞひまなき

この歌に似通った阿仏尼詠として「おもひやれ露も時雨もひとつにて山路わけこし袖のしづくを」¹⁴（『十六夜日記』71）を指摘することができる。

また、本書所収の歌には夢に関連するものが十三首見られる。全歌数が七十首中、夢の歌の占める割合は多い。『風雅集』には二人の贈答歌が三組入集している¹⁵。これらの贈答歌にも全て「夢」が詠み込まれていることも注目される。わずかな例を指摘するに止めるが、本書所収歌は為家と阿仏尼の歌風をそなえているといえるだろう。¹⁶

さて、為家と阿仏尼との贈答歌は勅撰集に五組入集している。それらの贈答歌は、いずれも出典未詳である。田淵句美子氏は、その出典資料として『建礼門院右京大夫集』のような長い詞書を持つ物語的日記的な歌集を想定されている。¹⁷それはまさにこの『松が浦嶋』なのではないだろうか。また、田淵氏はその書が南北朝期までは恐らく冷泉家

辺りに伝存していたのではないかと推測されているが、本書の奥書に示されるように冷泉家周辺ではないが、二条為明（1295～1364）の自筆本がかつては存在していたのである。或いは本書の精撰本には、勅撰集に入集した二人の贈答歌が含まれていた可能性もあるのではないだろうか。

結 び

これまで縷々述べてきたことを要約すれば、次のとおりである。

- 一、本書は藤原為家と阿仏尼との贈答歌集である。
- 二、本書は、阿仏尼が為家との思い出を風化させないように、いわば記念碑として編纂したものである。
- 三、本書の書名「松が浦嶋」は作者阿仏尼が命名したものであり、後人が仮に名づけたものではない。
- 四、本書の伝本としては松平文庫蔵本と篠山市立青山歴史村蔵本の二本が知られる。ともに二条為明自筆本を写したものだ、両者の間には本文異同が見出される。したがって、少なくとも二種類の為明自筆本が存在したことが想像される。
- 五、本書の現存本は未精撰の段階にあることを示している。

二の成立事情に関連して、最後に触れておきたいのは本書所収の贈答歌が交わされた時期である。贈答歌群からは、二人が同居を果たしていないこと、恋愛当初の気持ちが存続している様子などを見て取ることができる。「嗟峨のかよひ」で飛鳥井雅有が『源氏物語』の講義を聴くために為家の中院山荘に通い始めるのが文永六年九月のことで、その時すでに阿仏尼は同居している。これが同居を確認できる上限である。¹⁸⁾したがって本書には建長四年から文永六年

をやや溯る頃までの贈答歌が収められていると考えられよう。

【年表】

〈 〉内は、当該贈答歌中の歌番号と為家歌所収歌集を示す。

・ 建長四年 (一一五二) 冬前後	為家・阿仏尼贈答歌 (『玉葉集』)・『風雅集』入集贈答歌
・ 康元元年 (一一五六) 二月二十九日	為家出家
・ 康元二年 (一一五七)	〈19 夫木抄「毎日一首中」〉
・ 正嘉二年 (一一五八) 前後か	定覚を生む
・ 正元元年 (一一五九) 十一月十二日	宇都宮頼綱死去
・ 文応元年 (一一六〇)	〈29 五社百首〉
・ 弘長元年 (一一六一) 九月以降	〈22・30 後嵯峨院弘長百首和歌〉
・ 弘長三年 (一一六三)	為相誕生
・ 文永二年 (一一六五)	阿仏尼、「嵯峨のこばやし」に転居
・ 文永六年 (一一六九) 九〜十一月	為守誕生 ㊦この間に嵯峨の中院山荘に転居
・ 文永八年 (一一七一)	嵯峨の中院山荘で飛鳥井雅有に講義等を行う (『嵯峨のかよひ』)
・ 文永九年 (一一七二)	禅林寺殿御会 (為家、阿仏尼を同伴)
・ 建治元年 (一一七五) 五月一日	嵯峨から持明院の北林に転居
・ 弘安二年 (一二七九) 十月	為家、嵯峨で為兼らに三代集伝授
・ 弘安六年 (一二八三) 四月八日	為家没
	阿仏尼、鎌倉下向
	阿仏尼没

〔注〕

- (1) 『中世歌壇史の研究 南北朝期』井上宗雄 1979年 風間書房。尚、『阿仏尼全集』二二二一は「はかなさはある同じ世も頼まれずたゞ目の前のさらぬ別に」。この歌に似ると指摘する本書所収の女歌は、61番歌「はかなさはたがまこと、もたのまれずたゞうた、ねの夢もうつ、も」。
- (2) 拙稿「肥前島原松平文庫蔵『松が浦嶋』」について『国文鶴見』34号 1999年。
- (3) 函架番号 一三六・三一。参考までに、松平文庫本の書誌を略記しておく。
(大きさ) 縦27・0×横20・2cm。(表紙) 紺色帛繋ぎ牡丹唐草文様の艶出し。左肩に「松カ浦嶋」の題簽を付す。(丁数) 墨付き16丁。(装丁) 袋綴。(書写年代) 江戸中期。
- (4) 『青山会文庫所蔵 和漢書分類目録』財団法人青山会 1999年。
- (5) 青山本は、第一・二丁が乱丁と認められる。青山本の装丁は、列帖装で一・二丁が一折、三〜七丁までが二折、八〜十三丁が三折となっている。第四丁の後に一・二丁の一折を挿入すると文意も通じ、松平文庫本の本文とも一致する。このことから一・二丁の一折が抜け落ち、冒頭部に綴じ込まれたことよって生じた乱丁と認められる。
- また、落丁については、松平文庫本と比較すると、青山本は、第六丁「目をへてはいかにかせまし山かつの」から第七丁「あやにくなるはなみた成けり」の間に二十行（二行分の空白を含む）本文が脱落している。松平文庫本から脱落した本文を補うと、贈答歌として語句が対応する。青山本は一面十行書とする。一十行分の脱落ということは、一丁一折が落丁したものと認められる。
- (6) 今井明「松平文庫蔵『松カ浦嶋』—詠者不明贈答歌集について—」『香椎潟』49号 2003年。
- (7) 為家と阿仏尼との邂逅が建長四年であることは、石田吉貞氏（藤原為家の生涯）（『新古今世界と中世文学』（下）1979年 北沢図書出版）や佐藤恒雄氏「藤原為家の鎌倉往還」『中世文学研究』第二十三号 1997年）等に指摘されている。
- (8) 本文引用は、『校註阿佛尼増補版』柳瀬一雄 1981年 風間書房。
- (9) 勅撰集に入集する為家と阿仏尼の贈答歌については、後述のとおりである。それらが情熱的であるという指摘は既に、石田吉貞（注7）や、田淵句美子『阿仏尼とその時代 『うたたね』が語る中世』2000年 臨川書店）にみえる。
- (10) 本文引用は、『源承和歌口伝注解』源承和歌口伝研究会 2000年 風間書院による。
- (11) 『源承和歌口伝』には「阿仏尼が」嵯峨のこばやしに侍しほどに」に続けて「先人嵯峨にすみて日比之様に侍し」とあ

る。「嵯峨のこばやし」は未詳であり、阿仏尼が避難した「嵯峨のこばやし」と為家が後に住むことになる「嵯峨」とが同じ場所であるか否かは不明である。ここでは別の場所だと解釈した。すなわち阿仏尼はこの後「嵯峨のこばやし」から為家の「嵯峨」の山荘（源承和歌口伝）に言う「嵯峨之旧屋」に従って同居し、さらに文永八年頃、為家とともに持明院の北林に従ったと思われる。尚、石田吉貞氏が「藤原為家の生涯」（注9に同じ）に、正元元年宇都宮入道没後に二人が公然と嵯峨に住むようになったと指摘している。また、井上宗雄氏著『鎌倉時代歌人伝の研究』（断年 風間書房 二七六頁）にも指摘がある。

(12) 『玉葉和歌集全注釈』中巻 岩佐美代子 196年 笠間書院 三一頁。本文引用は、この書によった。（『風雅集』の引用も『風雅和歌集全注釈』中巻 岩佐美代子 2003年 風間書院による。）

(13) この他に暁の別れの歌は「玉葉集」（巻十・恋歌二）に見られる。

暁の時雨にぬれて女のもとよりかへりて、あしたにつかはしける 前大納言為家
 1456 かへるさのしの、めくらき村雲もわが袖よりやしぐれそめつる

返し

安嘉門院四条

1457 きぬくのしの、めくらき別れちにそへし涙はさぞしぐれけん

(14) 永青文庫本等の流布本は「おもひやれ」、九条家本は「おもへた」と初句に異同がある。

(15) 『風雅集』（巻十一・恋歌二）に入集する為家と阿仏尼の贈答歌は次の通り。

女とよもすがら物がたりして、あしたにいひつかはしける 前大納言為家

1086 いきてよのわすがたみとなりやせむ夢ばかりだにぬともなきよは

返し

安嘉門院四条

1087 あかざりしやみのうつ、をかざりにて亦も見ざらむ夢ぞはかなき

女のもとにあからさまにまかりて、物がたりなどしてたちかへりて申しつかはしける

前大納言為家

1101 まどろまぬときさへ夢のみえつるは心にあまるゆき、なりけり

返し

安嘉門院四条

1102 たましみはうつ、の夢にあくがれてみしも見えしも思ひわかれず

女のもとへ、ちかき程にあるよしをとづれて侍りければ、「こよひなん夢にみえつるは、しほがまのしるしなりけり」

と申して侍りけるに、つかはしける 前大納言為家

脚き、てだに身こそこがるれかよふなる夢のたゞちのちかのしほがま

返し

安嘉門院四条

105身をこがす契ばかりかいたづらにおもはぬ中のちかのしほがま

(16) 本書所収の男歌の中には、『秋思歌』に類似した歌を多く見出すことができる。これについては、稿を改めて考察したい。

(17) 『阿仏尼とその時代』『うたたね』が語る中世 田淵句美子 2000年 臨川書店。

(18) 角田文衛氏は、「為家が小倉山を詠んだ歌は、専ら建長から文永にかけての作に限られているが、文永元年から八年にかけてのものが圧倒的に多い。これは、康元元年（三五六）二月に出家した後の為家が専ら嵯峨の山荘で晩年を過ごした事実を示唆していると言えよう。」（新発見「定家の小倉山荘」国文学27 12 1982・9）と推測している。この説に従って、岩佐氏も文永元年以後に為家が嵯峨山荘に住んでいたとする。（『玉葉和歌集全注釈』下巻 1996年 笠間書院 二四三頁）。

文永十一年六月廿四日為家讓状（為相宛）には、「嵯峨すみの^{（初）}はしめ、大納言^{（讀）}ゆつり文にも」とある。「大納言ゆつり文」とは、文永六年十一月十八日為氏讓状を示し、これを書いた時期が嵯峨居住当初であったと解することができる。（『冷泉家古文書』 冷泉家時雨亭文庫編 1993年 朝日新聞社 により本文引用した。）

〔付記〕

貴重な情報を御教示下さった佐々木孝浩氏、翻刻をご許可下さった篠山市立青山歴史村名譽館長の畑治男氏に篤く御礼申し上げます。